

春より夏へ

賛助員

關 みをさ

燦として三月の陽の輝けば万象みな踊る光の中

三月の木には黙せう幹ぬちに生の力のみちみつ

廣重の繪のなつかしさ三月の東照宮の屋根の青

さび ほんのりと五重の塔の浮ぶ空春日の里は遠くし

ありけり すすくくと光の中に立つ木々を仰ぎぬ春は三月

の丘 ほかかりと霜どけの土に露の臺匂ひたるかも晝

の日は照る ゆるやかに枝を延して木々は皆息づけるらし春

の日の丘 涙ぐみ戸をあけにけり朝出で、歸れば月の光さ

す家 いそくとしやべるをとりて雛げしの種子をま

さけり移り來し家

詠草より

四年

松林うら子

豆の葉の甘きにほひを送りつゝ春風しろし三尾

の山畑 ゆるくと春の水こそ流れたれ松の林の奥をは

るかに おぼつかなみごりの中の桐の花うら若人の思ひ

にも似て うすむらさき青葉のかげにつゝましく桐の花さ

く日となりけり 初夏のあかるき空のおぼつかなうすむらさきの

桐の花さく 雲ひかる夕べを露のちりやますあふち花さく初

夏の家 はらくと雪こぼれて揺れやまぬ青桐の葉にさ

す薄日かな いざ今日も迷の中に生きてゐむ迷の鍋をかきま

せてみむ 人の世の迷の中にわれをなげ生きよといひて父

は去りにけり

東京に初めて得たる一握の尊き土に何をまかま

し いろくらの種蒔きて見ぬ苗植ゑぬ移り來し家の

珍らしさより 日の光ごもしき庭に物植ゑて花の咲く日を樂め

りけり 朝顔は朝なくと見れどもやしめき二葉なりけり

光ごもしみ 明日の日は花見をせむと樂しみて其夜よりわが

いぬる身となる たゞ一つ紅きものなるざくろさへ色あせて見ゆ

長雨つゞくに 日毎夜毎かくて彼地へゆく汽車のあるがふとし

もねたまれにけり 草引けばおよびに残る野の香こもり暮せし幾日

なりけり 小路より出で、小路に入る町の道にみたる鈴か

けの青

人はみな人を知らねば書の中に吾を見出でて心

なぐさむ 友といふものしあらねばひとりわれ淋しく強く

生きむとぞ思ふ ほゝゑみて語りしあとにくみくと心はいひぬ

何のうれしき かぎるひのゆふやまかげの湖岸に物思ふ日のた

ふとかりけり

ひこつくと

四年

てい子

ひとつくと月を見出でし喜びのあふれて開く待

宵の花 二人ゐる心地こそすれうち向ふ鏡の中のわれの

まじめさ ふと笑ふ聲をかしてまた笑ふかろき心の春の

旅路よ ものみなは暗に沈める眞夜中にしのびくと雪

ふりまたる

□

□

□